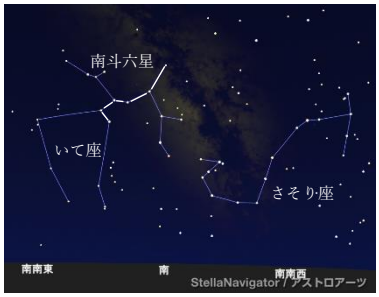
ジオスペース館だより

令和６年８月１日

第723号

★今月の星もよう★



８月の宵の空では、夏の星座を探す目印となる夏の大三角が天頂付近にまで昇って来ます。「こと座」、「わし座」、「はくちょう座」を見つけたら、さらに「や座」と「いるか座」を探してみましょう。明るい星がない星座のため、街灯などの人工の光が少ない場所で観察してみてください。小さくてかわいらしい姿は一度見つけたら、次からは容易に見つけられるでしょう。

「さそり座」のしっぽの毒針の東側には「いて座」があり、北斗七星とよく似た星の並び「南斗六星」が目印になっています。この辺りが天の川銀河の中心方向になります。

★スピカ食★

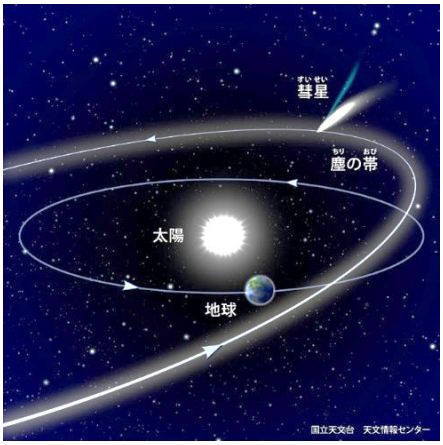
８月10日に、おとめ座の１等星スピカが月に隠される「スピカ食」が起こります。スピカ食は今年の12月25日の明け方にも起こりますが、宵の時間に起こる今回が観察にはおすすめです。

スピカは、豊川では20時21分頃、月の暗い側の縁（暗縁）から月に隠されます。そのため、スピカは月の明るく輝いている部分から離れた所で、突然消えるかのように見えるでしょう。そして、20時54分頃に再度月の明るい部分（明縁）から現れます。空の低い所で起こる現象なので、南西の方角がひらけた場所で観察しましょう。

★ペルセウス座流星群★

ペルセウス座流星群が8月12日深夜に極大（最も多くの流星が出現する頃）を迎えます。ペルセウス座流星群は三大流星群のひとつで明るい流星が多く、条件が良ければ１時間に50～60個の流星が見込まれる活発な流星群です。今年の極大は12日の23時頃と予想されていますが、放射点（流星群の流星が飛び出す天球上の点）が高くなる13日の夜明け頃まで、多くの流星が見られると予想されています。流星は放射点があるペルセウス座付近だけではなく、空全体に見られます。街灯などの人工の光が少なく、できるだけ空を広く見渡せる場所で観察してみましょう。

〈流星群はなぜその日に多く流れるのでしょう。〉



宇宙空間にただよう直径１ミリメートルから数センチメートル程のチリの粒が地球に落ちて来る時に、地球の大気とぶつかって発光して見えるのが流星です。そしてこのチリを宇宙空間にまき散らしているのが、ほうき星と呼ばれる彗星です。彗星の軌道上には放出したチリが帯状に密集しています。この彗星の軌道と地球の軌道が交差しているところでは、たくさんのチリの粒が地球に降り注いで来ます。地球が彗星の軌道を通過する日時が毎年ほぼ決まっているため、流星が1番多く流れる日が特定できるのです。このタイミングで日本が夜の側にあると流星が多く見られるというわけです。

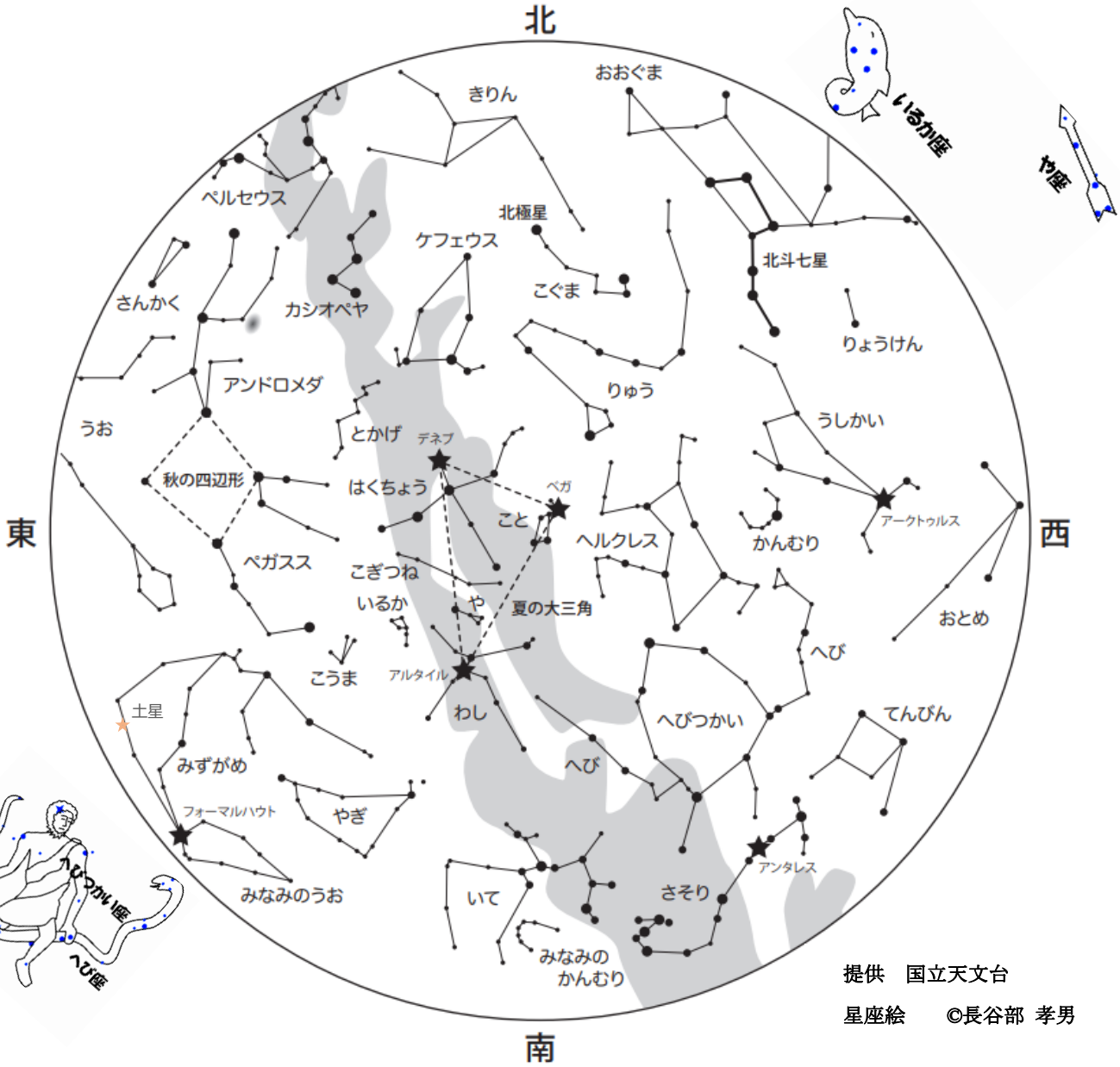
チリの粒は同じ方向からやって来て、ほぼ平行に地球に飛び込んで来ますが、それを地上から見ると、星空のある一点から四方八方さまざまな方向に飛び出してくるように見えます。この流星が飛び出してくる中心を放射点と呼び、放射点のある星座の名前が流星群の名前となります。また、ペルセウス座流星群のもとになる天体（母天体）は太陽の周りを約130年周期で公転しているスイフト・タットル彗星です。

豊川市ジオスペース館
GEOSPACE

☆８月のプラネタリウムの内容については、別刷りの「投影案内」をご覧ください

☆プラネタリウムのお休み　８／５（月）、13（火）、14（水）、19（月）、21（水）、26（月）

８月中旬午後９時頃の星空



提供　国立天文台

星座絵　　©長谷部 孝男

★ ８月の主な天文現象 ★

４日(日)	新月
10 日(土)	伝統的七夕
	おとめ座α星スピカ(1.0等)食
12 日(月)	23時、ペルセウス座流星群極大
13 日(火)	上弦
15 日(木)	火星と木星大接近
20 日(火)	満月(スタージョンムーン)
26 日(月)	下弦

火星と木星が大接近

今月中旬、明け方の東の空で火星と木星が同じ方向で接近して見えます。最接近する 14 日深夜～15 日未明にはふたつの星の間隔は約0.3°まで接近。これは 100倍程度の望遠鏡で同時に見ることが出来るほどです。